慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーシフ・ヴォロツキーの『修道院規則』簡素版(III) : 試訳(下)
Sub Title	Abridged version (III) of "The monastic rule" of Iosif Volotskii : a translation
Author	田辺, 三千広(Tanabe, Michihiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1989
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.58, No.2 (1989. 3) ,p.69(205)- 83(219)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19890300-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーシフ・ヴォロツキーの『修道院規則』・簡素版（Ⅲ）
――試訳（下）

田辺三千広

〈承前〉

第六章　《晩課の後で話を交わすべきでないという神の書からの話》

神を我が身にもつ聖なる師父によって決められたように、晩課後、修道院内で立ち止まって話を交わしたり、僧房に集まったりしてはいけない。ただ、修道院長のみが、何か修道院のことで必要なことを話す。しかし、秩序を保つために僧房で話すだけである。また、病人を除いて、誰も水を飲んではいけない。晩課は、聖なる師父達によって、一日の初めであり、しめくくりであると定められている。誰であれ、人というものは、昼にも夜にも罪を犯すことがありうるものであるから。

このため、晩課の歌の終った後で、空しく、はかないことについて意味もなく話しをしたり、誰かを非難したり、中傷したりするのでなく、心の柔和さと、心をくだくことによって、あたかもキリスト御自身の足にするように、修道院長の足元にひざまづき、過ぎ去った夜と昼に自分が行ったこと、話したこと、考えたこと、その全てを告白することがよい。聖なる師父達は、いつも、告白することを命じてきた。たとえそれができなくとも、死の恐怖を思えば、これらのことを告白することなしに一晩たりとも過ぎることはないだろう。というのは、多くの人々が夜、床に就き、朝、目を覚さなかったからである。主は言われた。私があなたを見つけるその状態で、つまり、改悛とざんげの中にいるのか、いいかげん

でふざけた状態にいるのかによって私はあなたを裁くと。もはや、改悛と告白ほど、死の時へのなぐさめとなるものは他にはない。

神御自身からと同様、修道院長から許しを得て、沈黙を守り、誰とも何も話さないよう自分の僧房へ引き下がろう。そして、黙ったまま祈りと手仕事、あるいは読書に精を出そう。また、祈りと涙によって、自分のことについて分別ある配慮をし、これまで犯した罪など全てのことについて主にざんげし、告白しよう。そうすれば、その日一日に犯した重荷から、その魂は救われるであろう。たとえ、ある夜、彼が死ぬことがあったとしても、彼は主なる神からなおざりにされることはないだろう。なぜなら、彼は、改悛と告白の状態で見つけられたのだから。主御自身、予言者達に強く言っておられる。「あなたを見つける状態で、私はあなたを裁くだろう」。主に栄光あれ。

第七章　《修道士は祝福を受けることなく修道院の外に出るべきでないという神の書からの話》

くり返して言うとくどくなるが、修道士にとって修道院長の祝福なしに修道院の外に出ることはふさわしいことでないということを知る必要がある。もし、我々が、必要のため、つまり、食物を得るため、衣服を得るため、また、仕事のために外出し、その時、祝福されたという返事をもらわなかったなら、祝福を受けていない全ての事は、呪われたものとなる。――もし、必要なことのためなら、我々の苦労が無に帰さないためにも、なおさら、祝福を受けて外出すべきであるのだが。もし、それが良いことであるのなら、何故祝福を受けないのか。良いことであっても、祝福を受けない時、それは良いことではなくなる。もし、ふざけたり、嘲笑したり、空しい言葉を話すというような、好ましくないことで外出するなら、これらのために我々の魂が地獄の火の中に投げ込まれることは明らかである。

修道士が、自分のことについて無頓着になり、修道院長の祝福を受けずに修道院の外を放浪し始める時、悪魔は、その者を捕まえ、彼を罪に陥れるか、殺すだろう。もし悪魔が彼を罪に陥れるなら、その時、救いの期待をもたない者のように絶望の状態に陥れ、師父への不服従の故に小心となった者を恥と羞恥心によって沈めてしまうだろう。悪魔は、そのようにして俗界にその者を引き

つれ、魂の永遠の滅びへと導いていく。九十歳になるある長老が証言しているが、そのような老齢で、彼は、師父の祝福を受けずに町に出かけ、誘惑に落ちた。そして、恥ずかしさためにすぐに告白することができず、付き添いの子供が、彼を僧房に運び込むまで、頑固に告白をひき伸した。そして、彼は会った人全員にめそめそと涙を流した。多くの人々は、悪魔の果てしない喜びを見て絶望した。もし、悪魔が彼を死に至らしめるなら、彼は、教父達の教えに背いた者として、明らかに神から裁きを受けるだろう。なぜなら、教父達の尊い書物の中に次のような話があるから。ある長老は、五〇年間修道院から外出せずに暮し、りっぱな修道生活を送ってきた。彼を羨んだ悪魔は、彼を誘惑し、祝福を受けることなく修道院から連れ出した。そして、彼の足を縛り、石にぶつけ、彼を殺した。人々は、彼の死について修道院長に伝えた。修道院長には、悪魔がその長老をどのようにして誘惑し、祝福を受けずに修道院から連れ出したのか見当もつかなかった。そして、修道士達に、死んだ修道士のことを自分と一緒に祈るように言った。彼らが、日夜祈っている時、彼らのもとにある声が届いた。自分の誓いを破った者を修道士の仲間に加えてはいけない。彼の足をロープで縛り、ひきづり出して、溝に投込めと。そして、彼らは、そのようにした。このため、教父達は、そのような者を埋葬したり、彼に供物を贈ったりすることを許さなかった。なぜなら、彼は、世俗の生活を捨て、最期まで修道院に留まるという誓いに背いた者であり、また、死に至るまで修道院長への服従を守るという誓いに背いた者であるから。

このため、兄弟達よ、酔いの悪嗅と死に至る針から逃れ、また、修道院長の許可なく修道院の外を歩き回るというような身勝手と不服従から逃れるように全身全霊をもって努めよう。そして、我々は、死ぬまで努力をし、神の掟の一字一句にいたるまで意を用い、いかなる時も、つまり、歩いている時も、話をしている時も、仕事をしている時も、教えにあるように、その枠組である規則を守ろう。栄光は我らの神に帰す。今も、いつも、そして、永遠に。アーメン。

第八章　《全ての人が教会の務めに励むべきであるという神の書からの話》

ここで、教会の務めについて語る必要がある。

誰もが教会の務めに励むよう配慮することが必要であ

る。大使徒パウロは次のように言っている。兄弟達よ、我らの主イエス・キリストの名においてあなたがたに命じる。掟を守らずぶらぶらしていたり、何も仕事をしないでいる全ての兄弟達から遠ざかりなさい。[1] 我々は、あなたがたがそのようであることを禁じ、静かに働き、自分で得たパンを食べるように主イエス・キリストによって命じ、また、勧める。[2] そして、働こうとしない者は、食べることもしてはならない、と。[3] このため、教父達は、この使徒の教えによって導かれ、修道士、特に若い修道士に、決して怠惰にならないように命じている。大マカリオス[4]も言っている。「怠惰な者は信者でありえない」。さらに、「怠惰は我々に多くの悪を教えた」。また、「働く者は一匹の悪魔と戦い、怠惰な者は千匹の悪魔に捕えられている」「働くことができるのに働かない者は、泥棒と一緒に裁かれるだろう」「共住修道院に暮す修道士は、次の三つのものをもたなければならない。それは、謙遜と従順と修道院の仕事に対する熱意である」と。聖エフレムも次のように言っている。「仲間の修道士と共に力に応じて手仕事に精出そうとしないこと、これこそ高慢と不遜の始まりである。そのような者は、食べるべきではない。我々が集まっている時、多言をせず、それによって修道生活を始めた熱意だけが必要である」と。『天国への梯子』の中でも言われている。「信仰が心の中で花開けば、それだけ肉体が務めに励む」。そして、「若い時代の労苦をひたすらキリストに捧げなさい。それは、苦しみのない豊かさを老齢になって喜ぶためである。若い時に集められた富は、年をとり、力のない者に糧を与え、元気づけるだろう」と。さらに、「我々若い者は、熱心に働き、自制して務めよう。なぜなら、死は不意にやってくるものだから。つまり、我々は、真に残忍で、狡猾で、誘惑的で、巧妙な、そして、力が強く、眠りを知らず、肉体をもたず、目に見えず、また、手に火を携え、彼らの手の中にある炎で神の教会を焼こうとしている敵をもっている」と。師父達は言ってきた。「荒野に座っていたアントニーは、ある時、疲れ果て、闇の中である考えに耽っていた。そして、次のように言った。主よ、私は救われたい。しかし、諸々の考えが私から離れません、と。そして、少しして、彼は、ある一人の男に出会った。その男は、座って籠を編んでいた。やがて、立ち上がり、祈った。そして、再び座り、籠を編み、また、立ち上って祈った。主の天使がアントニーの気持を正すために遣わされたのである。ア

ントニーは、自分に話しかける声を聞いた。そのようにしなさい。そうすれば救われる、と。彼は、それを聞き、大いなる喜びと勇気をもち、そのように行い、救われていった。」師父マトイは言った。「私は、大きい労苦ですぐに終ってしまう仕事より、容易であっても、長く続く仕事に携わりたい」と。スキットに住む修道士、師父イシドールは言った。「修道士達よ、我々は、労働のためにこの場所へ来たのではないのか。そして、今、我々は、すでに仕事をもっていない。私は羊の毛皮を用意し、仕事のある所へ行き、そこに安らぎを見い出すだろう」と。師父アンモンは言った。「我々は、ある時、師父アヒラのところに行き、彼が、次のような言葉を霊的教訓に使っているのを聞いた。『ヤコブよ、エジプトに下るのを恐れてはならない』(5)。そして、いつまでも同じ言葉をくり返していた。そこで、我々が戸をたたいた時、彼は、我々に戸を聞けてくれた。すると、夜中に、多くの籠を編んでいる彼を見つけ、彼に頼んだ。我々にお言葉を下さいと。彼は次のように言った。私は、夕方から今まで、二〇サージェン編んだ。そして、これ以上私はそれを必要としない。しかし、神が、何故お前は編むことができるのに編まなかったのかと言って私を叱るのではないかと恐れている。それ故、全力で働いている、と。我々には極めて有益であった」。

ある長老は言った。「人の前には四つの徳がある。それは、断食、神に祈ること、肉体の純潔、そして、手仕事である。悪魔は、これら四つの徳に逆って、アダムを追放した。まず、食物によって彼を躓かせ、次に、辱しめた悪魔は、彼に逃げ隠れさせ、神の前に近づけないようにした。そして、いつの日か、アダムが神の前に跪いた時、神は、彼の罪を許そうとした。堕落したアダムが追放された時、悪魔は、彼を自分の方へ引き寄せようとして、怠惰につけこみ、別の罪、つまり、絶望に彼を駆り立てようとした。人間を愛する神は、悪魔の狡猾さを見抜き、アダムに仕事を与え、あなたが取られた土を耕せ、と言った(6)。アダムが仕事に対し配慮をしていれば、悪魔の邪な考えから避けられるからである。完全に打ち敗された悪魔は、神に従う人々に誘惑的な美しさに仕上げた人間の娘を投げ込んだ。そして、神に従う人々の誇りを地に落とし、彼らを肉欲へと引き入れた。悪魔は、断食と手仕事にも忍び込んでくる。なぜなら、多くの手仕事は、彼の邪な考えを追払うものだから。実際、悪魔は、気高い純潔にまでも忍び込んでくる。もし、誰であ

れ、この四つの徳を実行できるなら、全ての徳をそなえることになる」。また、ある長老は言っている。「新参者は、従順と肉体労働以外、義務として行うべきことはない」。ある修道士が長老に尋ねた。「どうすれば救われるのか、私に教えて下さい。」長老は言った。「仕事に励みなさい。そして、怠惰になってはいけない。そうすれば救われる。」また、ある長老は言った。「人は自分の仕事をだめにしないためにも、それを続けることが必要だ。もし、誰れであれ、多くの仕事をし、しかし、それを続けなければ、何の益もない。もし、誰れであれ、少しの仕事をし、しかし、それを続けるなら、その人の仕事はいつまでも続く。」

話をすること、笑うこと、からかうこと程人を痛めつけることはない。聖ヨハネス・クリマコスも言っている。「ある者が、嘘をついて喜んだり、愚弄したり、空しい言葉で笑いをつくり、悲しみに沈んでいる人々の心の静けさをだめにしているのを私は見た。」大バシリオスも言っている。「全ゆる騒々しさを避けなければならない。なぜなら、これらの中に空しくいる者には、正しい教えに背くすることがよくあるから。そして、しばしば、この悪の道を歩く者は、非礼と悪口雑言の中でその一生を終えることになる。」使徒も言っている。「全ゆる汚れた言葉があなた方の口から出ないように。汚れた言葉によって神の聖霊を辱しめてはいけない。あなた方はそれによって証印を受けたのだから。」[7] 聖霊を辱しめること程悪いことはない。聖なる福音書の中でも語られている。「善人は、自らの心の良い倉から良いものを取り出し、悪人は、自らの心の悪い倉から悪いものを取り出す。なぜなら、心から溢れ出ることを口が語るものであるから。」[8] さらに言っている。「人は、語るその無益な言葉に対し、審判の日にそれについて申し開きをすることになる。」[9] 無益な言葉とは、必要がない言葉、つまり、嘘とか中傷とかである。ある人々は、無益な言葉は無分別で汚らわしく、破廉恥なへつらいの笑いであると言っている。聖ピーメンは言った。「沈黙しているように見える人がいる。しかし、彼の心が他人を非難しているような人は、いつもおしゃべりをしているのと同じである。そして、朝から晩まで話をしながら、静寂を守っている人もいる。彼は、益なること以外何も話さないのである。」金口ヨハネスも言っている。「騒々しさを生み出す人程、破廉恥な人はいない。なぜなら、彼の口は、病いと悲しみと偽りに充ちているから。」我々の共

同食卓から、そのような慣習を追放しよう。その騒々しさを謙遜な人々に説いている者がいる。[10] ああ、何とばかげたことか。彼らは、悲しみの中に沈んでいる人々を騒がせようと仕向けているのだ。私は、悪の上塗りの例を語り示そう。恥かしいのだが、話そう。彼は、嘲笑を招くことを知っているが、聞いた通りのことを話そう。ある人が、分別の点でとても利口な人々のうちの一人の所にたまたま居合わせた。彼は、食器が出された時、次のように言った。皆さん、召し上がって下さい。後で胃が苦しみますように、と。すると、他の人々が言った。ああ、富よ、あなたに災いあれ。そして、あなたをもたない人々にも災いあれ、と。これらの言葉は、うつろな魂の敬虔さである。そして、これらの言葉は、物が割れる音にも値しない。私は、あなたがたのことを極力祈っている。この慣習を追い払い、相応しい言葉を我々が語り、我々の尊い口が不純で汚れた言葉を発しないようにと。光は暗闇とどのような共通点があるというのか。騒々しさから怠惰が、怠惰から無頓着が、無頓着から無秩序が、無秩序から笑いと無遠慮が生じる。修道士達よ、笑いと無遠慮は魂にとって堕落の始まりである。聖エフレムは言っている。「修道士よ、もし、それらの中に自分を見い出すなら、自らが最期的な破滅の中にいるということを知りなさい。使徒は、賢明にも、我々に笑いと無遠慮の罪を示している。騒々しくする人々、仕事をしない人々を無秩序な人々と呼んでいる。無秩序な騒々しい人は、敬虔さに欠けている。そして、言葉に対して無遠慮な人であり、非難ばかりしたがり、沈黙に対し不馴れな人であり、落胆の奴隷である。このため、使徒は、重い病いを避けるのと同じように、そのような人を避け、無駄にではなく、働き、務めに精出し、また、笑いではなく、ましてや、おしゃべりではなく、昼も夜も、他人に迷惑をかけないように仕事をし、パンを食べるようにと教え諭している。自分の義務としてなすべきことをなすだけでなく、貧しい人々、巡礼、病人、老人のためにも仕事をしよう。なぜなら、そのような善行こそ、神にとって好ましい犠牲であるから」と。

以下は、教会の仕事に関するものである。

今、修道院の中にある限りの他の務めについて、勤勉さと神への畏怖の念をもって、いかにそれぞれの務めに配慮すべきかについて語ろう。大バシリオスが語っているように、その務めにあっては、それぞれが定められている。「キリストに仕えるように、礼儀正しく、熱心に

自らの務めを行え。なぜなら、主の御業を不真面に行う者は、呪いを受けるから。なすべきことをきちんと行い、邪なことや不注意を避けるように。たとえ、手にする自分の務めが取るに足りないものであると考えられようとも、神が見れば、その務めの行為は偉大であり、その行為は、天の王国で繋がれる。それは、その中に神の全ての戒律を含んでいる善行への魚網である。そして、何はさておき、まず第一のものは、多くの善行をもたらす謙遜である。次に、私が空腹になった時、私に食べさせ、私が喰の渇きを覚えた時、私の渇きを治し、私が旅人であった時も、病気であった時も、牢獄の中にいた時も私に仕えてくれた[11]、とあるように行うことだ。その時にこそ、怒りや不平からでなく、神を敬うような謙遜な心と賢明さの中で、行なうべきことが行なわれる。毎日、肉体労働と共に、あなたの務めを行い、仕えてもらっている人の御愛想に対し、それを和らげる言葉をもちなさい。あなたの務めが、塩加減の効いた好ましいものとなるように。自分に課せられた仕事を他人にさせてはならない。そうでないと、あなたから集められた富が他人に与えられ、あなたが卑しめられている間に、あなたの富によって他人が栄光を受けるだろうから。」

我々の師父で、修道院長であるジノンが語っていたように、聖者伝の中で次のように言われている。問い。私の務めが、神にとって好ましいものであるのかどうか、どのようにして判断できるのか。答。務めを行う人への最初の印、それは、良き思考と神への愛と畏怖の念である。第二の印、それは、全ての人への謙遜の心と賢明さであり、人に仕えると思うのではなく、天使に仕えると思うことである。そして、「私がいる所に、私に仕えようとする者もまたいるであろう[12]」という言葉に従って、キリストの祭壇の前に立っているつもりで思考することである。第三の印、それは、不平のない柔和な言葉を使うことであり、心から沸き出る嘆息であり、涙を流すことであり、神への畏怖の念であり、来世の恵みを望むことであり、託された人々への気配りである。そして、時を失することなく、また、必要以上に物を求めるのではなく、全てのことが神への信仰と畏怖の念と共にあるように。もし、あなたが、これらのことを見て、自分の中に感じるならば、その務めは、神の前でも、天使の前でも、人間の前でも好ましいものであり、神の意に添ったものである。もし、あなたの務めが、狡猾さやへつらいや無分別を伴うものなら、不平やもめ事やなげきとな

る。そして、食物を無駄にし、祈りに対して全く怠慢になり、内緒でものを食べるようになり、眠気をもよおす程に満腹し、恐れを知らず神から遠ざかり、託された修道士に対し無頓着になり、長老を避け、新参者を謗り、目上の人々を非難し、俗人を羨み、彼らと共に飲み食いをしたがるようになる。そのような奉仕者は、虚栄の友であり、傲慢さの弟子であり、名誉を求める者である。そして、修道院長から命ぜられたことを行なわず、修道院長の言うことを聞かず、全てのことを勝手に行い、修道院長から密かに離れ、悪魔を喜ばせる。そして、自分を破滅させ、イスラエルのアカル[13]の友となり、ゲハジ[13]の仲間となり、裏切り者ユダの弟子となり、アナニアとサッピラ[15]の兄弟となる。そのような奉仕者は、報酬のない骨折りをし、今ある報酬まで奪われる。そのような奉仕者は、昼には子羊であり、夜には狼である。そのような奉仕者は、外見上は修道士の中にいるが、考えでは俗人の中にいる。そのような奉仕者は、果実をつけない木であり、水の涸れた泉であり、根屋のない家である。そのような奉仕者は、悪魔からの空しい名誉によって糧をえ、傲慢さによって喉の渇きを潤し、破廉恥さを我身にまとい、反抗することを学び、狼獪さにとりつかれている。

そのような奉仕者の分別は暗くなり、思考は鈍り、心は固くなり、淫らな思いから見栄の中に誘われ、手淫の奈落に陥っている。そのような奉仕者は、共同生活の面で、異教徒の供物よりひどいものであった。なぜなら、異教徒達は、鳥や四つ足の動物を悪魔に供え、その下僕となった。一方、そのような奉仕者は、鳥や四つ足の動物を悪魔に供え、悪魔の友となっただけでなく、自分の全てを悪魔に供え、悪事に手を染め、思考を弱め、快楽にふけり、自分を悪魔そっくりに仕立てた。そのような奉仕者は、癇癪に満され、愚痴に満され、怒りによって苛まれ、悪い思いによって捕えられている。

何を多く語る必要があろうか。もし、断食と徹夜祷と祈りと告解と謙遜の念によって自分を改めないなら、天の王国から追放される。世俗を捨てた二人の修道士について、新神学者、聖シメオンも同じことを語っている。二人は若く、この世のどのような肉体的な罪にも汚されていなかった。その中の一人は、謙遜で、柔和で、従順で、人間にではなく、神に仕えていた。また、彼は、謙虚で、悲しみに沈んだような分別をもち、心の中でなにかと思索し、彼に尋ねる人々に対して次のように言っている。「師父よ、私は、在俗中、困窮の中でも大きな労

苦によって自分の食糧を手に入れることができました。私がここへ来て、どうして仕事を怠け、修道院のパンを無駄に食べ、裁きの日に、それについて申し開きをしたいと思うでしょうか。私は、神に仕えるために来たのですから、力の限り自分の食糧の分以上の仕事に精を出し、死ぬまで不平を言うことなく、キリスト御自身に従うように修道院長と全ての修道士達に従うでしょう」と。別の一人は、虚栄と不従順と怠惰によって打ち負かされて、言った。「ところで、神が、家とパンとブドウ酒を送って下さった。また、私は、はじめからの成員だ。だから、私は、望む者にも望まない者にも全ての人々の兄貴分である。私は、腹一杯食べて、飲む。私は、自分の仕事をし、他の者が受け取るようなことを何故今後する必要があろうか」と。もし、彼に働くようにと命じるなら、彼は、身体の不調を申し立て、泣き叫び始め、両膝が衰弱していると申し出て、次のように答えるだろう。「私の頭はすっきりせず、胃で悩まされている」と。朝から物を食べ、人を呪い、中傷し、全ゆる命令に逆らい、不平を言いたいのである。彼に何らかの仕事や務めを与えても、同様に、それらを無視してしまう。やがて、そのような状況にある二人に死が訪れ、彼らをあの裁きの日に連れて来る。裸で、左側に立っているあの狡い方を神が叱るだろう。その時、彼は、目を上げ、その右側に、かつて自分と一緒に暮し、自分と一緒に食べたり飲んだりした者が、まさに、キリストと共に大いなる栄光の中にいるのを見るだろう。その時、彼は、何を言い、何を答えることができるのか。結局、その者は、泣いて、震えながら、歯ぎしりをし、永遠の火の中へ投げ込まれるだろう。

他の師父は、我々に次のように語って言った。私は、ある師父を訪問するためにある共住修道院に行った時、私は、そこに長期間滞在し、その生活を見た。ある日、私は、管財係が台所に入って行くのを見た。彼は、何粒かのそら豆が地面にこぼれているのを見た。彼は、それを小さな取るに足りないものとして軽んずることなく、料理係の修道士を呼んだ。そして、神からその修道士に与えられた仕事を軽んじ、自分の良心を踏みつけたとして、彼に訓戒を与えた。そのような信仰と、大いなる勤勉さによって。彼らは、自分達の務めを守ってきた。我々には小さく、取るに足りないと思われるようなこと、そのようなことを彼らは、聖なるものと同じように、全ゆる配慮を払って守ってきたのである。もし、器や他の

物が、しかるべき場所に置かれていないのを見たら、これを畏怖の念をもって、器のあるべき場所に置いた。彼らは、これによって神から恩恵が与えられることを信じつつである、と。

註

(1) テサロニケ人への第二の手紙、三―六
(2) 同、三―十二
(3) 同、三―一〇
(4) 大マカリオス（三〇〇頃―三九〇頃）。聖アントニウスの弟子の一人。エジプトのスケティスの砂漠で修道生活を送る。
(5) 創世紀、四六―三
(6) 同、十七―十九。ルリエーによると、仕事に関する記述はヨーシフ独自のもので、何か経典外の文献をもとにしたのであろうと述べている（Я. С. Лурье, ≪Краткая редакция≫ стр. 123）。
(7) エペソ人への手紙、四―二九～三〇。
(8) マタイ伝、十二―三四～三五
(9) 同、十二―三六
(10) ルリエーによると「騒々しさを説いている者」とは、ノヴゴロド＝モスクワ異端の異端者をさす。（Я. С. Лурье, ≪Краткая редакция≫, стр. 127）。
(11) マタイ伝、二五―三五～六
(12) ヨハネ伝、十二―二六
(13) アカル。旧約聖書中の人物。歴代志上、二―七
(14) ゲハジ。不明。
(15) アナニアとサッピラ。新約聖書中の人物。使徒行伝、四―一～五

第九章　≪修道院内で、酔うほど酒を飲むべきでないという神の書からの話[1]≫

なぜなら、酔いは、全ゆる悪の始まりであり、終りであるから。そのために、我らの主イエス・キリストは言われている。「飽食と酔いにより、あなたがたの心に負担をかけないようにいつも注意しなさい」と。[2] また、使徒パウロは、「酒で酔ってはいけない。酒の中には淫らな行いがあるから」[3]と言っている。大バシリオスは、次のように言っている。「煙が蜜蜂を追い散らすように、酔いは、あなたがたを聖霊から引き離す。なぜなら、酔いは、情欲への扉であり、汚れへの導き手であり、放蕩をなす者であるから。また、酔いは、汚物に寄せる波であり、悪企みの海であり、言葉では言い表せない不浄の奈落であり、戯れ言、嘲笑、傍若無人の図々しさ、貪

欲、魂の鈍化、死の忘却、落胆と絶望であるから。そして、魂の堕落と分別の鈍化となる何にもまして堪難いものであるから。金口ヨハネスも言っている。「正に聖使徒パウロも言った。私は、彼らのことをしばしばあなたがたに話したが、今また、涙を流して語る。彼らの神はその腹であり、彼らの栄光はその恥であるそのような者こそ、キリストの十字架に敵対する者である、と。(4) あり余る程に腹を満たし、淫らに、そして、酔って暮している者こそ、キリストの敵であり、暴飲暴食をし、魂と共に肉体をも滅してしまう」と。

周知のように、酒を多量に飲む者は、悪魔にとりつかれた者以上に悲惨である。悪魔は、神の許しをえて、人間を苦しめる。一方、酒を多量に飲む者は、自分の意志によって、自分を滅ぼす。唾液は、酔っぱらいの口の中で腐り、悪臭を放ち、おくびは、家畜のようにひどいものだ。酔っぱらいの魂が穴や泥の中にあるように、肉体の中でどれ程汚れきっているかを考えてみなさい。多くの愚かな者達は、この祭日は尊いものであり、それ故、酒を飲み、愉快に過そうと言っている。分別のない者よ。一体、何を言っているのか自分自身でも分っているのか。あなたがたが、神の祭日を捨てたとたんに、悪魔を喜ばせることになる。なぜなら、あなたがたが、キリストよりも、悪魔に仕えることを望んでいるかのようだから。酒を飲み、放蕩にふける限り、あなたがたは、祭日を神のものと思わず、悪魔のものとみなしている。もし、あなたがたが、教会に入って来るなら、どのようにして神を称えるのか、私に教えてもらいたい。酔っぱらって悪臭を放つ酔っぱらいを、神は好まれない。ちょうど、我々が、死んだ犬の悪臭を忌み嫌うのと同じようにである。これら全てのことから逃れたいと思う者は、酔いを憎み、それによって、蛇の頭を切り落し、蛇の体全体を叩きつぶすように。

修道院の共同食卓においても、僧房においても、酔っぱらうほど酒を飲むべきでなく、とりわけ、多大の配慮を払い、努力をすべきである。たとえ、教父達の規則や聖者伝の中で、修道士は、適当な時間に、時には、一杯、また、二杯、三杯と酒を飲むものだと書かれているにしても、そして、彼らが、昔も今も全修道院内に酒を置いていたとしても、彼らは、酔っぱらうまで酒を飲むようなことはしなかった。多くの立派な人々が証言しているように、コンスタンチノープルや聖山アトスや、他の近隣の地域に住んでいた修道士、いや、修道士だけで

なく、全ての正教キリスト教徒は、酔っぱらうことを忌み嫌っている。正教徒だけでなく、異教徒達も、酔いを遠ざけ、嫌っている。誰れでも酒をもってはいるが、彼らは、肉体を滅すような疾患から逃れるように酔いを避ける。以前に私が言ったように、その土地には、その土地の慣習があり、それは、不文律であったり、土地柄であったりする。ルーシの地についても、異る慣習、異る掟がある。我々は、酔うほどの飲酒を行ない、自分を抑えることができず、酔っぱらうまで飲む。教父達が、一杯、あるいは、二・三杯飲むようにと教えているが、このことを我々は聞こうとはしないし、その限度を知らない。我々の限度とは、酔っぱらい、その結果、自分が分からなくなり、思考力を失い、何度も嘔吐する時であり、そうなって、飲むことを止める。そのような慣習、つまり、破滅的な習わし、罪を犯し易い素性の故に、我々は、修道院で、酔っぱらうほどに酒を飲むべきではない。酔いから、しばしば起りがちな永遠の破滅、淫乱の穴に落ちないようにである。栄光は、我らの神に帰す。今も、いつも、そして、永遠に。アーメン。

註

(1) この章は、一五五一年の教会会議の決議、いわゆる、ストグラフの第五二章にそっくり引用されている。ヨーシフとストグラフとの関係については、若干の考察を要するため、稿を改めることとし、ここでは、引用の事実のみを指摘するにとどめる。Российское законодательство X—XX веков, Т. 2, М. 1985, стр. 325—6.

(2) ルカ伝、二一—三四

(3) エペソ人への手紙、五—十八

(4) ピリピ人への手紙、三—十八～九

第十章 《修道院内で、少年と一緒に住むべきではないという神の書からの話》

聖なる書物は、少年について、次のように語っている。修道院に少年を引き連れるのは、神ではなく、我々の敵である悪魔であり、悪魔は、修道生活を送っている人々を惑わせようとしている、と。さらに、師父イサクは言った。「修道士達よ、少年を修道院内に入れてはいけない。私は、少年のために三つの教会が荒廃したのを見てきた」と。さらに、ある立派な長老がある修道院にやって来た。そして、そこに少年がいるのを見て、彼は、その修道院に入って泊ろうとせず、次のように言った。「ここにも何かそのような者がいるということを想

ただけで、私は、いらいらしてくる。何故、私は、必要もなしに、そのようなもめ事に係るだろうか」と。聖エフレムも、共住生活を送る上で、少年の害は大きいと言っている。さらに、修道院長ピーメンは言った。「自分と一緒に少年を住まわせ、そのためにとんでもない情欲の中で掻き、その少年を遠ざけないような者は、害虫によって虫食まれた畑をもっている者に等しい」と。さらに、聖者伝の中で言われている。ある時、悪魔が修道院の門のところへやって来て、その内に少年がいるのを見ていった。「私はここでは必要がない。なぜなら、この少年が、ここでは私以上に騒ぎを起こしてくれるだろうから」と。

このため、救われたいと思っている我々は、炎から遠ざかるように少年から遠ざかろう。そして、家の内でも、我々を見ている人がいない場所でも、彼らと一緒に居ないようにしよう。彼らから遠く離れた席に座り、彼らの顔を見ないようにしよう。その顔を見ることによって、悪魔から与えられる情欲の種子を受け取り、一握りの土と滅びに決して至ることがないようにしよう。我々は、我々に毒ではないと言って投げ入れられる悪魔の企みを信じるのではなく、まさに、少年を目にすることや一緒に住むことが罪であるとみなそう。なぜなら、悪魔は、それらのことによって多くの人々を焼き、永遠の火に委ねたものだから。

第十一章　《修道院内に女子が立入るべきではないという神の書からの話》

金口ヨハネスは、女子について語っている。「女子と同席することや、しばしば話を交わすことは、修道士にとって密通であり、りっぱな姦淫である」と。果して、あなたは、石でできた人間なのか。あなたは、普通の生き物である。あなたは、自分が破滅へと近づき、懐の中に火をもっていながら、自分は焼けはしないようにと望むのか。干草が燃えないと思うなら、干草の上にロウソクを置いてみなさい。女子と一緒に食事をし、酒を飲み、笑い、そして、彼女らと話を交わしながら、それでも童貞と呼ばれたいのか。そんなことを私には言わないで欲しい。そうではなく、行状や言葉や思考を集めに歩いている裏のことを知りたがっている者に言って欲しい。神の掟と都市の法は、次のことを命じている。女子、いわんや、修道女子は、埋葬のためでも、また、他の理由であっても、男子修道院に立入ってはいけない

と。我々は、現に存在する正しい意味での女性を忌み嫌うものではない。しかし、彼女らが我々に近づけば近づくほど、情欲の想いが起こり、分別がかき乱され、曇らされ、多くの苦悩がひき起こされる。それについて、聖マルキアンは正しく述べている。羞恥心のない女と言葉を交わすより、悪魔と言葉を交わす方が良い。また、姿が良くて美しく飾られた女と同席するより、悪魔と同席する方がましである。なぜなら、人間の本性は変わりやすく、善も、気をつけないと容易に悪に変わるものだから、と。『天国への梯子』の中で、正しく述べられている。我々は、口にしないと約束した果実を避け、見たり、聞いたりしないようにしよう。もし、我々が、自分を予言者ダビデよりも強い人間であると考えるなら、驚きである。それこそ、不可能なことである、と。そのため、我々は、あらめる努力をし、我々の教父達の教えに従い、大なる誘惑に陥らないように、目や耳から入ってくる小さい誘惑から我が身を守らなければならない。そのようにして、我らの主なるイエス・キリストの御名において我々は救われることができる。主に栄光と尊敬と崇拝が、今も、いつも、永遠に。アーメン。（完）

〔付記〕

『修道院規則』の試訳に当り、多数の方々の御助力を得ました。特に、故木村彰一先生、愛知大学教授佐々木秀夫先生の両先生には一方ならない御指導を賜りました。心から御礼を申し上げます。訳に関する不手際も多々あろうかと存じますが、その責任は一切私にありますことは申すまでもありません。